寄り添う二人

浬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
寄り添う二人

【Ｎコード】
Ｎ２００２Ａ

【作者名】
浬

【あらすじ】
恋は楽しいけど、難しくて、しかも辛いそんな事を思ってる一人の少年の物語

第一話　スタート

俺の名は渡邊治樹（わたなべはるき）
１４歳　中二。青春真っ只中だ。

「恋か・・・」

「どうした？フラれたか？」
こいつは健一郎　俺のダチだ

「フラれてはないけど・・・」

「まあ、治樹の事情があるわけだ。」

「そんな感じ」

健一郎は誰にでも優しいし、容姿がすごい！
　モテルわけだ。

「そうそう、治樹に言わなきゃいけない事があったんだ」

「ふーん」

「大事な事なのに、聞かないと損するよ」

「ふーん」

「じゃあいいんだ、せっかく美羽と愛に誘われたのに・・」

「え！？！！！！いつ？いつ？」

「急に元気になりやがったな（笑い）治樹らしいけど」

「それより～いつ？いつ？」

「あせるなって、日にちは今度の土曜日だ！予定あけとけよ」

「了解！！！これは神が俺にくれた、天のプレゼントだ。」

「大げさだなおい」

「ようし！」

美羽は上品で綺麗な大人っぽい人だ、学年でベスト5には入る美人愛はおとなしいけど、喋りだすと止まらない、ちょっと天然入ってる。学年ベスト3に入る。

治樹は健一郎の肩をポンと叩き
サンキューといった。

「そいえばさ、何して遊ぶの？」

「うーん、まだ決まってないけど予定は海に行く」

この言葉を聞いた瞬間、俺は幸せすぎて死にそうだった。

「えーと、水着を見れるわけですか？」

「もちろん！」

俺はその日眠れなかった。

～土曜日～

目覚ましが鳴る。

いつもなら、寝ているが今日はデートの日だったため起きる！

顔を洗い、髪形を決め、ご飯を食べ、家を出た。

待ち合わせ場所に5分位前につくと健一郎がいた。

「ういっす～」

「おお、来たか！」

「まだ、女の子達来てないの？」

「後ろ～」

後ろを振り向くと女の子達がいた。

「おはよう♪」

ま！さ！に！美声～～～～

俺を癒す美声～

変な妄想していると。

「どうしたの？治樹？治樹？」

気づかず妄想していると、健一郎が治樹の肩を叩き

「起きろーーー治樹起きろーーー」

「お！？あ、ごめんごめん」

「しっかりしろよーーーー」

三人同時に言う。

「気を取り戻していこう！」

「なぜ、お前が仕切る！！！」

これまた、三人同時に言う

「オイオイ～俺じゃあだめか～～～」

「うん！」

「三人同時にいいやがって、もういいよ（泣）～」

「冗談だよ（笑い）」

健一郎

「うんうん、冗談だよ」

美羽

「まあ、冗談だよ」

愛

「行きますか！」

この一言でみんなが動きだす。

俺らの・・・・・

恋の夏が始まろうとしていた。

第一話　スタート（後書き）

初めての恋愛小説なので、うまくないで、読んで下さった方々感想ください（できればでいいので

第二話　子供

海～海～海～
治樹の心は海の事でいっぱいだった。

「海～」

「え！？治樹～海って？今日海行かないよ？」
この言葉を聞いた治樹は沈んだ。
「えーーーーーーー俺なんも聞いてないんですけど・・・」

「ごめん、治樹、すっかり忘れてた。」
オイオイ親友よ、いつも大事な事言わないのやめてくれ。

「まあ、いいけどさ、どこ行くの？」

「そこのファミレス」
親友さ～ん、デートがファミレスですか～俺は妄想しまくって昨日眠れなかったのに
ファミレスかよーーーーー

そんな治樹の心の中の叫びも知らず、健一郎と女の子達はファミレスに入っていく

「治樹～いそいで～」
愛の美声で俺は歩き出す。

「いらっしゃいませ」
ウエイトレスに誘導され席にたどり着く。

その時・・・
健一郎と目が合う。
（席は狙ってる子がとなりでいいよね？）

（ＯＫです！！！）
やりとりをアイコンタクトですますと。

愛が
「席はどうするの？」
（待ってました！！！！）
俺の心の声
「こう座ろうよ。」
モテ男の健一郎が言うと・・・
俺の隣に大好きな・・・大好きな・・・愛が！！！！！
今なら神を信じられるとか思ってしまった。

みんな楽しく喋っている。

そして、時間は過ぎていく・・・・

「あれ！？もうこんな時間！帰んなきゃ、今日は楽しかったよバイバイ～」
美羽が帰りだす。
健一郎の寂しい顔を見た！！！！！！

（ドンマイ！！）
「愛はまだ帰んなくて大丈夫なの？」

「うん、まだ大丈夫だよ～」
そして、また健一郎と目が合う
（ここはやはり、俺は帰った方がいいのかな）

（すまんな、健一郎、この借りは返すよ）

（ま！頑張れよ！）

（ありがとうな）
このやりとりを1秒間でやった。
一瞬・・・一瞬だが、俺らの友情レベルは五段階評価でＭＡＸなの
ではないのだろうか。
と思った。

「俺も時間だから帰るよ、じゃあな～」

「バイバイ～」

「おう、じゃあな」

とうとう愛と二人っきりになってしまった・・・
これは神様がくれたチャンスだとしか言いようがない。

ずっと喋っていた。
ってか喋っていたい。
そんな俺の気持ちとはうらはらに時間はどんどん進む。

俺はこの時がずっとあればなあとか思っていた。
まず、ありえないのだが・・・

「やば、夜じゃん、帰るね」

「家まで送ってこうか？」

「え！？いいの！？じゃあ遠慮なく～」

（これは、やはり、俺は神様に好かれてるんだろうか、本気でそう思ってしまった。）

送ってる時も俺は君は嬉しそうに喋っていたね。
俺はそんな嬉しそうに喋る君が好きだよ。

俺は君の事が好きなんだ。

時間が過ぎていく・・・愛との大切な時間が過ぎていく・・・

「じゃあ、ここで、今日は楽しかったよ～バイバイ～」

「あのさ」

「ん！？何？」

「また、遊ぼうな～」

「うん！そうだね、じゃあ～バイバイ～」

「バイバイ～」

俺は精一杯でこんな言葉しかいえなかった。

でも、本当に嬉しかった。また遊んでくれるなんて、今日は最高だ！

浮かれて浮かれて、スキップしそうな勢いだった。

（俺は恋する乙女かい！）

こんな事を思いつつも、頭の中は愛の事でいっぱいだった。

だが・・・
俺は重大な事にきづいてなかった。
その重大な事とは、メアドを聞くと言う事であった。
はっきり言おう。
俺はシャイです。
めちゃくちゃシャイです。
だから、学校で聞けないのです！！！！
ハァ～とため息つくが
（ま！いいっか、今日は最高だったし）
こんな感じで浮かれていた。
夏っていいなーーーー

やっぱり、祭りとか花火とかだよな

俺は空を見ながらそんな事を考えていた・・・・

第三話　動揺

俺は空が好きだ。
ものすごく好きだ。
空は俺を慰めてくれる。

俺はベットの中に入り、寝た。

「私・・・治樹の事好きなんだ」

「俺もだよ」

そして二人は熱いキスをする・・・・・

（なんて事あったらいいよな～）
そんな事を考えながら治樹は寝た・・・・

いつもの時間に起き、いつもと同じように学校にいく。

そして、健一郎と会う。

「おはよう～」

「おはよう～」

二人とも眠そうに話していたが、いきなり健一郎の顔が真剣になる。

「ところでさ、昨日はあれから、なんかあったのかよ？」

「特になんもないけど」

「なんもない！？そんな馬鹿な！二人っきりだぞ二人っきり！あるんだろ？」

「送っていった、だけだよ」

「おお！送っていったのか、良かったな！好感度アップだ！」

「朝からハイテンションだね」

「まあな！！！！」

そんな他愛もない話をしていると、教室につく。

治樹と健一郎は同じクラスで愛も同じだった。

美羽はとなりのクラスだった。

教室に入るとそこには愛がいた。

俺は愛しか目に入ってなかった。

愛を目で追ってしまう俺がいた。

愛が話しかけてきた。

「昨日は楽しかったね、ありがとう」

「俺も楽しかったよ、ありがとな」

治樹と愛は楽しそうに喋りだす。

治樹と愛の大切な時間。

また治樹は思うのであった。

この時間が永遠になればいいなと・・・・

楽しそうに喋る二人を見て健一郎は

『頑張れよ』

小声で呟いた。

二人が喋っていると

先生が入ってくる。

二人は席に戻った。

席に戻ると治樹は窓の方を向き

空を見た。

俺の大好きな空

でも、俺はそれ以上に愛の事が好きだ。

愛と喋っていると、心がドキドキしたり、嬉しくなる。

愛の笑った顔が好き、楽しそうに喋る口も好き

俺は重症だ、こんなにも愛の事を好きになってしまうなんて

重症でもなんでもよかったんだ。

俺は愛が好きだから

第三話　動揺（後書き）

日常が少しずつ少しずつ変わっていく・・・

第四話　幸せ

窓を見ていると、愛が話しかけてきた。

「治樹～」

「どうしたの？」

「あのさ、今度いつ遊ぶ？」

（神様！！！！多分　俺は今一番あなたに感謝してるでしょう！！）

「いつにしようか、みんなに聞かないとわかんないかな」

「あ、その事なんだけど、二人で行かない？」

（えええええーーーーーーーーーーーーーーーーーー
　俺の叫びは天まで聞こえただろう）

「うんうん、二人で行こう」

「え！？本当に！？嬉しい♪」

（今の俺は世界でベスト３０に入る幸せ者だぜ）

「そこ！何喋ってるんだ。」

先生に見つかってしまった。

この時、先生を怨んだのはゆうまでもない

「あ、すみません」

同時に言った。

俺は愛の方を見る。
愛も俺の方を見る。
目が合う
二人は目が合うと笑った。

休み時間になった。

治樹は授業中愛の事でいっぱいだった。
前にメアド聞けなかったから、聞こうと決心していた。

「愛、さっきの事なんだけど、学校でその事話すのやばいから、メアド教えて」
（自分で何を言ってるのかわからなかった）

わかるのは、心臓が高鳴ってる事だけ

「うん、いいよ♪」
メアドと番号を教えてもらう。

男子からの視線が痛い
でも、愛の事でいっぱいだったから気にしなかった

学校にいた時間が短く感じた。
気のせいかもしれないけど

愛といると時間の流れが速い
不思議だ・・・

家についた治樹は携帯を取り出し
愛にメールした。

[治樹です。メアドありがとう、遊ぶ日どうしよっか?]

早くメール返ってこないかな~すごくドキドキしていると
すぐにメールが返ってきた。

［愛で～す♪遊ぶ日は今度の日曜日でどう？］

［わかった。日曜日な］

そして、メールのやりとりが続く・・・

楽しい時間がまた始まる

［もう寝ます～おやすみ～］

［うん、おやすみ］

（よっしゃあー好感度アップだぜ！！）

治樹は幸せだった。

愛が居る日常が幸せだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2002a/

寄り添う二人

2010年10月20日17時20分発行